

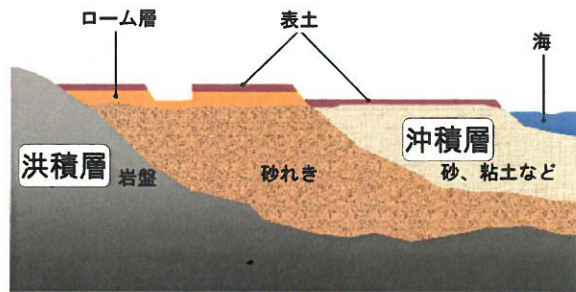
すくも
自主防災会だより
第9号

宿毛の地盤は？

去る3月14日、真夜中の2時6分、ガタガタガタ…。下からやや突き上げるような揺れで目が覚める。「来たッ！」「南海地震！」数秒が長く感じはしたが、続いて起きるはずの長く大きな横揺れにはならない。「ん？」「小粒なやつか？」まもなく揺れがおさまると、少し固まりかけていた体が何かスッと楽になりほっと恐怖が消える。急いでテレビをつけて地震情報を集め、震度や震源地を確認、津波の心配がないとのフリップを見てどつと安心。やがて何事もなかったように、また眠りにつく。皆さんの多くもだいたいこんな感じでその時をやり過ごしたのではないだろうか。

伊予灘を震源としたマグニチュード6.2の地震。最大震度は「5強」が西予市、その一方で、松山市や伊方町などは震源にかなり近いエリアにもかかわらず「5弱」どまり。そして、わが宿毛市が何と「5弱」とある。小生の少し錆びついた体内震度計では震度「4」以下と瞬時判定(かなり

一方的)しただけに、「5弱」は全く意外なものでした。いたい市内のどこに設置している震度計が「5弱」という最大値を記録したのか？関心がおありの向きは市役所に問い合わせてみるのも面白いかも。



な要素ですが、案外意識は薄いようにも感じます。

そここの地盤はもちろん「沖積層」、いやいや「埋め立て地」などであったとすれば、このぐらいの震度が刻まれるのはむしろ当然なのかもしれません。自分が住んでいる家や地域の「地盤(戦う土俵)」の特性をよく知ることは、「揺れや津波(戦う相手)」の特性を知ることにも増して、関心を持つべき重要

あなたはいかがでしょう。お住まいの地盤の強さを意識したことがありますか？地震が発生したときに、テレビの速報を見ると多くの「震度」が発表されますが、震源地に対して震度の大きさが距離に比例していないことにお気付きの思います。これは地震による揺れがその地盤の性質によって伝わり方が違うために起きることなんです。

地盤の性質はその生成された年代により、大きく分けて洪積層と沖積層とに分けられます。一万年以上の古い時代に堆積した洪積層は固くしまっているために、地震の揺れが伝わりにくく液状化などの被害に遭いにくい。そのため、古くから重要建築物はこの洪積層が露出した土地に建てられることが多いのです。これに対して沖積層とは土砂が堆積して陸地になった場所で、非常に柔らかく、地震の際に揺れがとてつもなく伝わりやすいのです。同一エリアにおいて、場合によっては沖積層の場所に建てられた家は震度5の揺れが観測されたにもかかわらず、ほんの少し離れた洪積層の場所に建った家では震度3しか計測されないということが当然生起するわけです。同じ強度を持った家であっても、その地盤によってこれだけの違いが生じることをあらためて認識し、準備と対応にぬかりなきを期したいものです。

最後に、旧プロシヤ王国の生んだ戦略家クラウゼヴィッツの大作「戦争論」より、次の言葉を引用して結びとします。「戦場を知り、敵を知り、そして何より己(おのれ)を知らば百戦危うからず…」と。「己」とは、危急の大災害に直面し、いざという時に逃げられないかもしれない、逃げる腹づも

りをもてないでいるかもしれない、そんな自分自身であることもお忘れなく。

宿毛市自主防災会連絡協議会
役員代表 河野典生

3月14日に発生した伊予灘地震の震度5弱(計測震度4.5)は、市役所本庁舎裏の駐車場に設置されている強震観測施設で計測されました。



宿毛市役所裏 来庁者駐車場